



TITLE:

<書評>山口裕子. 『歴史語りの人類学--複数の過去を生きるインドネシア東部の小地域社会』 世界思想社, 2011, 396p.

AUTHOR(S):

太田, 淳

CITATION:

太田, 淳. <書評>山口裕子. 『歴史語りの人類学--複数の過去を生きるインドネシア東部の小地域社会』 世界思想社, 2011, 396p.. 東南アジア研究 2011, 49(2): 337-340

ISSUE DATE:

2011-09-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/152146>

RIGHT:

一集落を超えた広い視野に立った調査を行ったからでもあり、また、人々の目線で、人々の言葉によく耳を傾けながら可能な限り共感的理解に努めた調査活動に基づく記述であるからに他ならない。その結果、地域というまとまりを常に念頭に置きつつも、個々人の相互に異なる人生、あるいはその個人ならではの努力や創造性といった面をも大切に描くことができた（特に第6章と第8章）。

以下、若干の不満点を述べたい。1960年以前の先行研究や非実証的カンボジア文化論の批判的検討は第1章にまとまっている他、第2章以下では近年行われた個々の研究に文中で言及しないかわりに各章の冒頭で主な論点について述べる、としており、民族誌的記述にページを割く必要がある以上、この書き方で正解であろう。ただし、全ての章の冒頭で先行研究に言及しているわけではない。また、第3章のボル・ボト時代に関する記述部分で、人びとの集団としての移動や日常の労働単位についてはかなり解明されているのに対し、居住単位としての世帯がどのように解体されたのか、あるいは全く解体されなかったのかがやや不明瞭であるように感じた。これについては、解体されたとする先行諸文献と引き合わせての分析があってもよかったのではないと思う。

次に表記の面についてである。本書では初出のキーワードにカンボジア（クメール）語表記が併記されている。カンボジア語の音を表す適切なカタカナの選択にあたっては常にジレンマが伴うが、カンボジア文字表記を添えることでこの悩みを一部解消でき、またカンボジア研究者には大きな助けとなる。また、儀礼で聞かれる実際の発話内容や何気なく言葉にされた生活実感などに原語を併記することにより、それらの細部に真実が宿ることが読み取れると同時に、著者のカンボジア語力が極めて高く、データに信頼がもてることが伝わる。ただし、カンボジア国内においても若干の揺らぎがある正書法（綴り）とは別に、本書の表記には誤記と思われるものがわずかながら含まれる（例を挙げれば、p.321の儀礼で唱える言葉の一部、p.378「授戒師」、p.411「貝葉文書」「（宗教の）実践」、p.418「保守主義」、p.424「混ざり合った」、p.510とp.512～513「プノンペン」）。今後のカン

ボジア研究の必読文献として長く読まれるに違いない本書だけにこの点は少々残念である。増刷の折にはぜひ訂正されることを願う。

また、調査時から10年ほどを経て刊行された本書では、現在までに変化した事象も多いということで、調査時の事実を過去形で記述することに納得しないわけではないのだが、調査時「現在」として現在形で書いても良かったのではないかなと思う。というのも、本書が扱うタイムスパンとして調査時以前の過去も含まれるため、その部分は当然過去形で記述せざるを得ない。ならば調査時を現在形にした方が誤解を生みにくい。「……していた。」という記述が、調査時「以前」にそうであったかのような読み違えをしそうになることがしばしばあった。

最後に、本書は専門書ではあるが、ぜひ大学学部生にも広く読まれてほしい。大部ではあっても記述が平易な本書は学部生にも十分に読みこなせるだろう。カンボジアへの関心が高く、国際協力を含め将来何らかの関わりを持ちたいと考えてはいても、カンボジアのイメージはと問われれば「アンコール・ワット」以外に、「内戦」「地雷」「貧困」という語彙しか持たない——もちろんこれらは現在もカンボジア社会の理解のために重要なキーワードであり続けていることは確かだが——彼（女）らにぜひ読んでもらいたい、そして広がりとおと行きのある宇宙としてのカンボジアをあらためて探求してほしいというのが、一大学教員としての筆者が一読後にもった最初の感想であった。

（高橋美和・愛国学園大学）

山口裕子、『歴史語りの人類学——複数の過去を生きるインドネシア東部の小地域社会』世界思想社、2011、396p.

本書は、人類学者である著者が、スラウェシ東南に位置するブトン島のウォリオ（人口約1,700人）とワブラ（約2,200人）という二つの小地域社会を対象に、人々が互いに齟齬をはらむそれぞれの歴史をいかに語り、その語りが生活の中でいかに生きているか、そしてその齟齬が何を示して

いるかを、フィールドワークと文献調査に基づき考察したものである。その成果は、人類学と歴史学の方法を結合させた、非常に価値の高いものと言える。以下、まず本書の概要を示した後、評者のディシプリンである歴史学の立場から論評したい。

序章はまず対象社会を紹介し、次いで本書の方法論を説明する。ウォリオはブトン県の首都パウ・パウの近郊に位置し、住民はウォリオを首都としたブトン王国（14世紀頃～1960）の王族または貴族の末裔で、大半が王国時代に作られた王城要塞の中に住む。人々は歴史的謂れを持つ岩や墓などとの接触を通じて王国時代を記憶し、日常的に歴史事象を話題にする。ワブラはブトン島遠隔地にある農村で、住民はブトン王国の平民の子孫である。ワブラ人は一年周期の儀礼の中で起源地（彼らの始祖が最初に定住した地）に巡礼し、歴史を儀礼的に再演する。ウォリオ人の語る歴史はきわめてウォリオ中心的なブトン史であるのに対し、ワブラ人の語る歴史はワブラ中心のかつウォリオ人のブトン史に対峙的である。続いて著者は自らのアプローチを、二つの社会の歴史語りを持つ叙述のほころびの在りようや性質を見きわめ、さらに多面的なほころびをはらんだ状況そのものを説明するために、対象社会を時間的、空間的に複数のコンテクストに位置づけ、その間を行き来して得られる考証の結果を相互反証的に（対話的に）検討する方法と説明する。

第1章はウォリオ社会の現在の村落生活における歴史語りの実践を記述、分析する。ウォリオ社会には位階制があるが歴史知識の分布に不均衡はなく、あらゆる人々が話し手または聞き手として、日常の様々な機会に歴史語りに参加する。ウォリオ人によるブトン史の語りには、しばしばインドネシア史や世界史上の出来事と接点を持ち、ウォリオ城塞に模範的中心性を与えるといった特徴を持つ。

第2章はウォリオ人が語るブトン史を通史的にまとめる。重要な事象のみ記すと、ジョホールから来た4人の貴族が、ウォリオの森を切り拓いて王国の基礎を作った。ジャワに侵攻したモンゴル人と、ウォリオ近隣の女性との間に生まれた女兒が、その貴族達によってウォリオ王国の初代女王

と決定された。1541年、第六代王ムルフムはイスラームを受容し、初代スルタンとなった。第六代スルタン・ラ・ブケは海賊トベロ人からの防衛のために、住民に城塞を建設させた。この海賊以外には敵の存在は語られず、王国は常に強大で「銀河政体」の中心であったことが示唆されている。

第3章は、主にヨーロッパの一次資料に基づいてブトン王国の歴史を再構成する。16世紀半ば、マルク地域の人々はテルナテとティドレを父母、ブトンを含む周辺の島々をその子供たちと認識した（ビクサガラ神話）。1580年、テルナテはウォリオを征服しブトンをイスラーム化した。17世紀半ばからテルナテ、マカッサル、オランダは地域の覇権をめぐり激しく争ったが、最終的にオランダが武力で他の二国を圧倒した。ブトンは一時マカッサルに占領されるが、オランダはそれを追放してブトンをテルナテの従属国と再定義し、その後内政干渉を続けたと著者は述べる。つまり欧文資料の語る内容は、ブトン史が語る強いブトン王国像と相当乖離している。

第4章は現在のワブラ社会における歴史語りの実践を記述、分析する。ワブラはつい最近まで経済開発に取り残された村落社会であったが、ワブラ人はそれを本来のブトン王国の模範および中心として語る。毎年の伝統的農事暦儀礼の一つでは、年長者が村内の若者を連れてワブラ人の起源の村コンチュヤやその他の歴史的地点を巡ね歩き、過去の出来事群について解説する。

第5章はワブラ人の語る「真実の歴史」を再構築する。それはウォリオ人のブトン史の枠組みに整合、連続しており、ブトン史に書かれる出来事をすべてワブラで先に起こったと述べる。そしてウォリオに従属させられたのは、第四代コンチュ王クマハがウォリオ王ムルフムに騙されブトンの中心的地位から追放されたためとする。この正当化のためウォリオ人は真実でない歴史を書いたとワブラ人は語る。

第6章は二つの歴史語りの齟齬の質とそれを成立させる要因を探究する。著者はスハルト時代の文化政策が、それぞれの社会に中心性と誇りの喪失をもたらしたと論じる。中央政府が進めたインドネシア各地方の文化伝統を調査・記録するプロ

ジェクトに対応して、中央とつながりが強かったウォリオ人は自らの歴史をブトン史として政府に認めさせ、ブトンの代表・中心としての地位を獲得した。しかし1964年に東南スラウェシ州が成立した時、その首都は中央政府の利便のため陸域のクンダリに制定された（それまでスラウェシ州東南スラウェシ地方の首都はパウ・パウ）。1969年以降外部出身の州知事のもとブトン文化の再興が推し進められた一方で、ワブラを含む平民村の文化は周辺化された。王族集団の一部も弾圧を受け、スハルト体制に忠実な集権的地域社会が形成された。現在はウォリオで文芸復興運動と新州分立運動が盛んで、歴史語りはウォリオでもワブラでも興隆しているが、それは現在の民主化と地方分権化の流れが、失われた中心性と誇りを回復する好機と考えられているためである。ウォリオの発信は様々な対話空間——ブトン社会、計画中の新州など——を生みウォリオの中心性を高めているのに対し、ワブラの声はウォリオ社会にも中央政府にも届かず、対話空間の創造が達成されていない。

第7章は、ワブラ人のウォリオ社会に対する対抗意識の要因と、彼らの歴史の真実さが揺らがない理由を探究する。著者は、答えの一つは、ワブラ人がウォリオを中心とし自らを周辺とするブトンという枠組の歴史を実感していることにあるとする。さらに著者は「真実の歴史」の証拠は、その語り及び語りがなされるワブラ村という生活の時空間そのものの中にあると述べる。ウォリオ社会内部でも歴史が頻繁に語られ生きているのは、それが数々の歴史の標しからなる生活の時空間に根ざしているからとされる。

本書はブトン王国に関する本格的な歴史研究としては、リフトフート [Ligtvoet 1878]、キールストラ [Kielstra 1908]、スホール [Schoorl 1994; 2003] に続くものである。これらの著作が基本的にオランダ語資料に依拠したのに対し、本書はさらにポルトガル文献 [生田 1998] やイギリス東インド会社の資料をも分析することにより、ビクサガラ神話の世界観や英蘭の商業競争といった、より広い歴史的文脈にブトン王国史を位置づけている。

著者の歴史記述はやや古典的で、16世紀から17世紀半ばまでのブトン王家の王位継承や周辺王国

ならびにヨーロッパ勢力との折衝を中心とする。この記述方法は、17世紀半ばまでの王位継承や王の事績を重点的に述べるウォリオの歴史語りと比較検討するために採用されている。それにも関わらず、著者の歴史記述は新鮮で魅力的である。16世紀までのマルク世界がブトンやパプアまでを包摂したことは知られているが [同上書]、17世紀以降のブトンは16世紀末から急成長したマカッサルの強い影響下に置かれたと考えられがちである。しかし著者によれば、ブトンはマカッサルに対抗するために、テルナテやオランダに提携を求めるしたたかな外交を行う。二つの強国の勢力圏の狭間にある小国が、さらにオランダにも対応するために、協力や裏切り、時に戦争を繰り返しばとく生き残るさまは、東インドネシアにおける広域秩序の形成と展開を考える上で興味深い。もっともブトンが生き残る上で、外交戦術に加えてどのような社会的、経済的要因が働いていたのかは気になる点である。また、国家の枠組に拠らない、人やモノの移動を通じた他地域とのつながりも考察の課題となり得よう。17世紀後半以降は、テルナテに代わり影響力を強めるボネに対抗するために、むしろブトンの方がオランダを再紹介させようと試みている [Ligtvoet 1878]。オランダ支配が一応の完成を見た後の広域秩序の展開も精査される必要があり、それにはオランダの未刊行資料も利用可能であろう。もちろん、これらは著者の分析対象外であり、むしろ本書に刺激を受けてさらなる歴史研究が現れることを期待したい。オランダ支配以前の王位継承や王の事績を確認するという目的においては、刊行資料を利用した著者の選択は合理的である。

しかし、トベロ人海賊については議論の余地がある。リフトフートが渉猟したオランダ語資料にブトンにおける海賊の被害が初めて現れるのは1794年頃で、その後1830年頃まで頻繁に記録される。フェルトゥーン (Esther J. Velthoen) によれば、16世紀末からテルナテの影響下でスラウェシ東部タンブクを拠点とした海賊——狭義のトベロ人 (ハルマヘラ島北部トベロの出身者) に加えブギス、マカッサル、マンダル人などで構成された——が、しばしばトベロ人と呼ばれた (広義のト

ペロ人)。彼らは18世紀にはテルナテとの関係を絶ち、スラウェシ東部で海賊活動を行った。1790年代になると、対オランダ反乱を指導したティドレの王子ヌクを支持するマルク諸島各地の出身者達が、スラウェシ東岸のトロ湾にトペロとよばれる新たな居住地を作った。彼らはタンブク海賊と連携し、ブトンを含むさらに広い地域を襲撃した。1816年にはタンブク海賊と連携したボネの貴族によるブトン攻撃もあり、一連の襲撃によるブトンの被害は甚大であった。オランダは1826年にタンブクを攻撃するが、海賊を制御出来るようになったのは1850年代以降である〔Velthoen 1997: 374-382〕。従ってウォリオ人の語るトペロ人襲撃は1794-1830年頃である可能性が高く、そうするとウォリオ城塞の少なくとも一部がこの時期に建設されたことも考えられる。実際この時期にはブトン島各地で海賊からの防衛のために砦が建設されている〔Schoorl 1994: 41-42〕。トペロ人に関する問題は、さらに資料を渉猟し分析する必要がある。

本書の最大の魅力は、複数存在する歴史語りを複数の時空間コンテクストの上に位置づけ、その関係性を考察するという方法にある。著者と同様に人類学的フィールドワークと歴史学的文献調査を組み合わせたスホールも、口承資料にはウォリオ側の物のみを利用しており、ワブラの語りによってそれを相対化した著者の功績は大きい。これにより本書は、歴史とは本来的に、異なる文脈における複数の話し手と聞き手を持つ、複数の語りであることを読者に再認識させる。現在の歴史学において歴史語りの複数性は十分認識されており、従来のマスター・ナラティブ（国家を頂点とする権力行使者による語り）で捉えられなかった周縁の人々の歴史を扱うことは、もはや異端ではない。しかし歴史研究では周縁に位置した人々に関する資料の発掘は著しい困難を伴い、しかもその語り手の社会生活や歴史語りがいかに行われたかの考察はさらに困難である。しかし本書は、異なる歴史の記憶が、異なる文脈に生きる人々の経験と関係性の中で生成され再生産されていることを鮮やかに示した。さらに著者は、マスター・ナラティブとの関係（時に対話的というより一方的

または暴力的であるにせよ）の中で小地域社会で再生産される複数の語り（オルタナティブ・ヒストリーズ）を注意深く歴史的に分析することにより、その語りが現在そして未来にまで及ぼす影響力を示すことに成功している。このような歴史の生成と再生産の過程および歴史語りの力について、歴史研究者はもっと自覚的であるべきである。

著者は序章で、素朴実証主義とポストモダンの相対主義がメタレベルで批判の応酬をする時代は過ぎ去り、洗練された実証レベルでの対話が必要であるとの見解を示した。著者は本書の成果をメタレベルで理論的に要約することはせず、さらなる実証研究が今後も続けられるべきであることを示唆している。理論化の試みはむしろ、歴史その他の分野の研究者も巻き込んだ対話の中で進められるべきであろう。本書はそうした今後の対話の出発点を示した、問題提起的な著作と言える。

（太田 淳・台湾中央研究院）

参考文献

- 生田 滋. 1998. 『大航海時代とモルッカ諸島——ポルトガル、スペイン、テルナテ王国と丁字貿易』東京：中央公論社。
- Kielstra, E.B. 1908. Het sultanaat van Boeton. *Onze Eeuw* 8: 452-472.
- Ligtvoet, A. 1878. Beschrijving en Geschiedenis van Boeton. *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 26: 1-112.
- Schoorl, J.W. 1994. Power, Ideology and Change in the Early State of Buton. In *State and Trade in the Indonesian Archipelago*, edited by G.J. Schutte, pp.17-59. Leiden: KITLV.
- . 2003. *Masyarakat, Sejarah, dan Budaya Buton*. Jakarta: Djambatan and Perwakilan Koninklijk Instituut voor Taal-, Land-, en Volkenkunde.
- Velthoen, J. Esther. 1997. “Wanderers, Robbers and Bad Folk”: The Politics of Violence, Protection and Trade in Eastern Sulawesi 1750-1850. In *The Last Stand of Asian Autonomies: Responses to Modernity in the Diverse States of Southeast Asia and Korea, 1750-1900*, edited by Anthony Reid. Basingstoke and London: Macmillan Press.